

## 子宮頸がんワクチン 現場からの啓発

村中 璃子

京都大学医学研究科 非常勤講師

子宮頸がんワクチンは、HPV（ヒトパピローマウイルス）が子宮頸がんを引き起こすというノーベル賞を受賞した画期的発見をもとに、2006年に開発された人類史上初のがん予防ワクチンです。WHOも接種を強く推奨し、世界約140か国で使用、約80か国で定期接種となっています。日本でも2013年4月に定期接種となりましたが、歩けない、痙攣する、生理不順、体が痛い、まぶしい、勉強ができなくなったといった症状は、子宮頸がんワクチンのせいであると訴える人たちがメディアに現れました。特にテレビで繰り返し放送された、激しいけいれんする女の子の映像は衝撃的で、日本社会には「子宮頸がんワクチンは危険である」という誤解が広がりました。一般にはあまり知られていなかったことかもしれませんが、脳波に異常のないけいれんである偽発作や器質的異常のない痛みなどは、子宮頸がんワクチンが使われるようになる前から、思春期の子どもたちでよく見られていた症状です。ところが、訴えを考慮した日本政府は、定期接種化から2か月後の2013年6月、HPVワクチンを定期接種に定めたまま「一時的に積極的接種勧奨を停止する」という決定を行いました。その結果、社会には政府がHPVワクチンの危険性を認めたかのような誤解が広がり、HPVワクチンは事実上の接種停止に陥りました。2016年7月27日には、国とワクチン製造企業2社を相手取った世界初の集団提訴まで起きています。日本では毎年、子宮頸がんによって約3000人の命と約1万個の子宮が失われています。この失われていく命と子宮は、ワクチンと検診を普及させることで「ゼロ」にすることが可能です。本講演では、子宮頸がんと子宮頸がんワクチンに関する基本的な知識の整理に加え、社会問題化している背景について解説し、失われなくてもよい命や子宮が失われていく現状について考えます。また海外にも広がりつつある日本発の反子宮頸がんワクチン運動の現状と各国の対応についても解説します。WHOは2019年1月「国際保健上の10の脅威」のひとつに反ワクチン運動を挙げ、特に反子宮頸がんワクチン運動を重点項目とするとしています。